

---

# マリッジ・ブルー

アメメン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリッジ・ブルー

### 【Nコード】

N5531C

### 【作者名】

アメメン

### 【あらすじ】

30過ぎて見合いをして、やっと捕まえた男と結婚まで漕ぎ着ける事に成功。仕事に追われる男に替わり、引越しの準備をしている女性。そこに若い女から意味深な電話が入る・・・。

その呼び出し音は、3回鳴っただけで留守電に繋がってしまった。  
若い女の戸惑ったような声が吹き込まれていく。

側まで飛んで来ていた私は、思わず耳をそばだてた。

「えっと・・・今まで3年間、本当に楽しかったです。二人だけの大切な思い出として胸の奥に仕舞っておきます。あの・・・昨夜は、泣いたりしてすみませんでした・・・それから・・・えっと・・・あの・・・どうぞお幸せに・・・」

慌てて受話器に手を伸ばした時には、もう電話は切れていた。

誰なのよ？・・・という疑問が頭の中をグルグル回る。

昨夜ですって？・・・昨夜は、残業で遅くなっただって言っていたのに・・・。

仕事が忙しいって言うから、代わりに引越しの荷造りをしてあげているのに・・・。

私は受話器を持ったまま床に座り込み、ぼんやりと段ボールの山を見回した。

荷造りが出来ないと新婚旅行には行けないから・・・などと脅かされて、泊まり込みで彼の部屋の片づけをしている最中だった。

甘い生活なんて期待してはいなかったが、ちよっとは幸せを掴んだ気になっていたものだから一発殴られたくらいのショックを受けた。でも、電話が切れる前に受話器を取っていたらどうなっていたのだろうか・・・？

チクショ〜！

私は立ち上がると受話器を床に叩き付けた。

いっその事、この時に破談にしてしまえば良かったのだ。

30を過ぎて何回目かのお見合いでやっと決まった結婚だったから、

なんだか後が無いような気がしていた。

もし破談にでもなったら、親や会社の同僚、友達に何と言えよいのだろう。

格好悪くて恥ずかしい。

人がどう思うかなんて本当はどうでも良い事なのに・・・そんな自分の人生と引き替えにはいけない事が、重要な事のように思えてしまう。

彼との付き合いが長くて気心が知れていたら、問いつめる事が出来ただろう。

でも、そんな事が出来る仲では無い。

それに電話の主が誰で、どういう関係なのかが分かったところで何かが変わる訳では無いような気もする。

結局、その時間は買物に出掛けていた・・・という事にして、電話があつた事にさえ気が付いていない事にしてしまった。

どちらにせよ、式の一週間前に破談・・・というのは、たとえ全面的に相手に非があつたとしても受け入れがたい。

でも、長い人生を考えたら、受け入れてしまった方が良かったのかもしれないけれど・・・。

それからの一週間は「彼は、私との結婚を選んだのだ・・・彼女との事は終わったのだ」と、何度も自分に言い聞かせた。

お陰で楽しみにしていたブライダル・エステは効果が無かった。

ところが式の当日、ウェディングドレスを着て鏡の前に立った瞬間、全ての霧が吹き飛んだ。

思ったよりも綺麗な自分の姿に見とれて舞い上がってしまったのだ。全ては夢だったのかも・・・とさえ思った。

気のせいだったのかも・・・。

披露宴が終わるまでの間、魔法に掛かったシンデレラのような気分

だった。

本当に、恐ろしいくらい幸せだった。

そんなステキな披露宴も終わり、控え室に戻った時だった。

「会社の連中が、君に挨拶しておきたいって言うんだけど・・・」と、夫が顔を覗かせる。

新妻として、生まれて初めて「主人」という言葉を使った。

自分の中に湧き出した「妻の自信」というものに妙に感動してしまつた。

その事に興奮したせいか、上司や同僚、同じ課で働いている事務の女性達に必要な以上の愛想を振りまく。

「彼女が、ブーケを取ったのよ。」

年配の女性が、妙に後ろめたそうな顔をしている若い女の背中を押した。

「これ・・・貰っちゃいました」

作り笑顔でブーケを振って見せる女の声が鼓膜に届いた瞬間、全ての魔法が解けていった。

代わりに不安と絶望が、暗いシミの様に目の前に広がっていく。

「次ぎに花嫁になるのは、私かも・・・」と、聞き覚えのある「あの声」が意味ありげに言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5531c/>

---

マリッジ・ブルー

2010年10月14日22時51分発行